

● 高澤良一 第四句集 ぱらりとせ

● 夏

青あらし鯉の英気を養へる

青桐の幹の葉混みに自若かな

切り出してここら青嶺の水利権

吉野ぶり青葉時雨に目覚めけり

あぢさゐの色ならぬ色みえくる日

ボテ口描きしモナリザでぶで汗ばめり

難陀竜王即断下し給ひけり

あめんぼの脚のかしやかしこぜりあいや小競合あち

推力の一桁違ふあめんぼう

頭の内はまだ遊びあるあめんぼう

あめんぼうくんずほぐれつ日の暮るる

新進のあめんぼ滑り出しにけり

あめんぼのドンファンぶりも板につき

雨音の奥に雨音明易し

鮎釣の雨暗に竿納めざり

菅笠の仰向くは鮎釣れるとき

折合のつきし如くに蟻別る

石畳朝儀に参ず蟻ならむ

夜のあわび一枚岩を這ふといふ

腕っこき海女の揚げたる大あわび

藺座布団きちんと坐り直しけり

一八の旺んなる中葬りけり

だんだんと水の高鳴る岩魚釣

ふなばたの湿り鶉舟の出を待てり

ばしゃばしゃとばしゃりと水を打ち了る

海の家二つこつきり日本海

付けたりの固き枝豆昼の酒

炎昼の時間の檻に入るごとし
炎帝の何一つ手を下さぬに
日の盛引っ張り出して片付けもの
炎天へ妻着て出づるジャワ更紗
豌豆の花ぬくぬくと砂地畑
莢透いて海の日とほる豆の部屋
上品の大山蓮華咲きにけり
泳ぎ出す亀の子鼻を反らしけり
問題にしをり藪蚊の侵入路
蚊柱がいつぽん立ちぬ党派心
ユスリ蚊の柳を好む別派かな
蛾を追ふて兼六園の夕雀
茱萸の木より蛾のモスグリーンはたはたと
悪食のヨトウガ奴の仕業なり
ガーベラにプラチナ線のやうな雨
筒っぽの海芋は雨を蒐む花
古き湯宿ががんぼの発つ脱衣籠
かがんぼのずりおちさうな後ろ脚
卒塔婆に高脚を懸け蚊の姥は
かがんぼの礎石を発てり国分寺
かがんぼの脚踏み外す髭草
柿の葉鮓ほおれば雨響くなり
巡礼の遠のくやうに蝸牛
でで虫のでん公雨を呼びにけり
柿芽吹き蟹の鋏のやうな芽を
渡り蟹いろの夕映え額染めて
来る波に蟹のたじろぐ岩っ角
泡の中蟹の何やら策しをり
赤黴の自治領蟻が通りけり

闇を翔け来たる強肩兜虫
天牛のつままれ鳴きのいと女女し
魚籠の皮剥もうおだぶつの顔したり
島泊り別誂えの鱧料理
岐阜提灯ならではのこのアトモスファイア
吉野の日子ぼしの上を通りけり
曲がることついつい忘れ優やさ胡瓜
すぐ掬へさうな金魚をしくじれり
葛練や山の肩より山覗き
女郎蜘蛛木の葉外しにかかりけり
蜘蛛の糸すすつと見えてすすつと消ゆ
日の当りながら物食ふ女郎蜘蛛
月の夜の海月が考へさうなこと
海を出て水母の一つ昼月に
証垣毛虫に先を越されたる
源五郎へへと闇より現はるる
かはほりに問答無用と昏るる空
通り魔の如くかはほり頭を越せり
兼六園松が根を見て氷水
片町に朝の氷を挽ける音
しなしなの氷掬へり岐阜城下
わたしには氷いちごの真っ赤なやつ
雑草あらくさとしての勢ひを五月山
黄金蟲手っ取り早く翅畳む
かなぶんに玻璃戸を引きて助け船
ごきかぶり初太刀二の太刀かいくぐり
ごきかぶりゲストのやうに現はるる
共用の水色ポロシャツこどもの日
境内のこれは別格百日紅

珊瑚樹の花にあがれる雨飛沫
三伏の肩を叩きて肩の音
十一のイントネーション真似易し
曼荼羅圖喰うとは紙魚のふてえ奴
同一の紙魚の仕業でありにけり
お氣入アロハ押し込む旅靴
赤松に対す秩父の暑に対す
立ち寄りて菖蒲青張る八日堂
代田に引く水の咳き込むごとくなり
張る水はどぶろくに似て代田なる
道祖神巡り代田を迂回して
常念岳じょうねんの膝下早苗の丈も伸び
ややこしくなる前の蔓白南風に
天気もちにもって新緑寸又峡
素足吹く風あり本を読み継げり
糸からくり大きな所作の音涼し
涼めとや清涼寺式釈迦如来金澤文庫
何といふ涼味ホルンのまあるい音
雪溪の風に画用紙めくれけり
にいにい蝉生ぬるく夜の明けにけり
法師蝉走り込み鳴きしたりけり
死してなほ肉付きのよき蝉の肩
みんみんの持論力説するごとし
時国家湯殿にとほる蝉のこゑ
蝉穴の瞑さに辺り暮れて来ぬ
鳴き納む蝉ヂリヂリとヂリとヂと
死す蝉のそのままドンキホーテ面
つくつくし前口上を端折りけり
朝蝉の頭越しなる喧し屋

ゼラニウムに金盥めく太陽が
突端に来てそら豆の花の道
そら豆の撓むかたちはダリ好み
そら豆の怪童に遭ふ夢のなか
そら豆をつまめば指の温みほど
葉の混み来てアンリルソ一の泰山木
水中に田亀もさつと昏れにけり
水垂みずだれで降りて七滝だる巡りかな
滝飛沫あびてアリアを聴くごとし
滝水の巖過ぐとき巖いろ
滝水の下に滝水割込めり
花ダチュラ押さばばふばふ鳴るならむ
風采のあがらぬ花よポンポンドリア
その頃の花ではポンポンドリアかな
父の日の酔ひて子よりも早く寝る
乙鳥塩田平に乙鳥にんじんいろの朝鮮人にんじん参小屋
親鳥とおもふ頭が見え燕の巢
長良川朝風乙鳥吹き上げて
大潮の日と聞く燕ふりあふぎ
移動せり梅雨の黒雲バツファロー
梅雨の浪へこと凹みてたゆたへり
梅雨大扉入るや洞なす大仏殿
梅雨籠りあうむの与太を飛ばしをり
悪たれる鴉を相手梅雨晴間
教団の使者とし来たる天道虫
十勝晴れ天道虫が肩に来て
屯して天道虫のローティーン
ふふふと地に息かけて蜥蜴出づ
十葉のむつと一雨ありさうよ

十葉の筒芽棒立ち選佛場
家ぬちに風通る日や心太
日の下に田螺の大愚どぢやうの愚
荒凡夫土用太郎の波起こす
ほんとうに軽く一膳漬茄子
訃音告ぐ子田淵ひで子さん逝くの名は穂高立夏経て
海原は鯤の背隆と夏が来て
牛乳の泡泡を押す夏の朝
夏霧のじはつと鳴れる日本海
精悍なにほひの蔓でありにけり
キリストの鼻かむやうに夏の風邪
夏服に永年勤続祝がれをり
鯛・鯉昇れや虹の太鼓橋
色合ひをつべこべ云ふな虹は虹
文字摺草きりきりしやんと立ちにけり
大難の降り懸かるごとうぜん花
川中島過ぐる辺りか幟見ゆ
再犯の金蠅なれば許さざり
じたばたと蠅取紙の蠅の脚
箸取りていちいち蠅を追へるひと
葉ざくらに一も二もなく染まりけり
金輪際動かぬ蓮の間の水
蓮開きジャポニズム展開催中
蓮咲くとイスパニア語にて言ふならむ
蓮の葉の瑕つけ合うて風の中
花南瓜尻窄まりの通り雨
頑張りのきくうちが華花かぼちや
もうひとつ桐の筒花拾ひけり
南米産バナナは台湾バナナの横

協賛の某花火あがりけり
あがりたる初手の花火の高さかな
中華風彩色花火あがりけり
ポカポカと追打かけて昼花火
ストトンとききがけ花火揚がりけり
手花火に興じゐしこゑ引つ込みぬ
揚花火表六玉もあがりけり
長岡の花火帰りの道真直
川幅のそれと知らるる花火舟
ひょうたんの花等類を好みけり
パイヤへ銀の額をもてる朝
はんめうの背後にそつと息詰めて
酌小原紫光さん逝くみ初めはきのふのごとし冷酒ひゃの旬
吃逆しゃくくわのやうに冷酒注ぐなかれ
疎遠なることはともあれ冷し酒
雛罌粟のごとき欠伸を内房線
せつせつせ雛罌粟咲いてぱらりとせ
だいそれたことを言ひ出す冷奴
馬車道を歩きがてらのアイスクリン
雪村の鯉にまたがりゐし夢か
昼寝より覚めてうまづらはぎの顔
藻を離る気泡のごとく昼寝覚
昼寝覚一陣の風つまさきに
古ぼけし畳の目あり昼寝覚
軒風鈴ついついこんなことまで書く
舟蟲の吾に続けと云ふごとし
舟蟲の這ひ廻る岩減りもせず
舟虫や怪傑ゾロを彷彿と
舟虫の鬚をそよるの翁ぶり

老舟虫時化占ひの髭を立て
蛸狩知り合ひのゐて声かはす
トパーズいろサファイアいろの蛸とぶ
山峡を一つほたるの急行便
よろよると平家蛸の草隠り
海鞘の酢が利きてぴくんと長まつげ
木杭に呪文かけられかいもちかき
南無南無と円光負ふてかいもちかき
まひまひの気合ひの入りし一円相
まくなぎのこんちくしょうめ躓ける
まくなぎの何こじれたる内輪揉め
名舟衆切籠泣かせて山を降る
デカメンが割り込み御神乗夏太鼓
すと現れて幽霊面を受け継ぐ子
華やぎて雨の降るなり祭月
雨だれの音のとんとん祭月
生りものを包める産毛実梅にも
人拒む色をとほせり水芭蕉
緑さす籐編み籠に籐の鳥
大南風勇魚の息をつくやうに
大南風瞬りしひよこより柔らか
鯨に入道雲の聳ち損ね
ぐわらぐわらと峰雲崩る筈もなし
花ミモザライオン色に太陽は
むずむずと田虫送りの火のすすむ
松明の高いいっぽん虫送り
一祖二祖六祖祖師像お風入れ
時頼公強装束のお風入れ
木斛咲きじわじわむしむしする日なり

灸花やたらむしやくしやする日なり
灸花けふの暑さの如何ばかり
白象のごとくけだかく雲灼けて
やぶれ傘油じむ日を浴びゐたり
白雨を浴びをりペリカン修道士
夕焼渥美清さん逝くけに挙句の果ての寅次郎
神々の乗り込む船が夕焼けて
海上に夕焼屈み込むやうに
夕焼けて年増女のやうな舟
かのこ百合やうやう暑さ納まるか
すがれても姥百合背筋ぴんしゃんと
ヨット馳せグレープフルーツ色の海
トランプのジャック振向く夜の秋
月琴の音締めきりきり夜の秋
はたた神大だんびらを振りかざし
雷神の太刀先杉をばらりずん
ちやかぴかとそれも端はなからはたた神
鳴神の逢瀬天上往き来して
東ひんがしに取って返せりはたた神
その伝で云へばなまくらはたた神
首筋に蝉の羽月の風受けて
礫山のタッチ若葉のやはらかさ
うねり出すぶだう若葉のみどりの炎
わさび田を素通る水の垣間見ゆ
音もなく葉わさび潜る水の暮れ
わさび田の小流れ夕日返しけり
わさび田の水を束ねる處あり
山葵の旬水入れ替はり立ち替はり
山葵田の小石に当る水の音

二年ものわさびの花に穂高の日
蝶追うてわさびの花も飛びさうに
霧濡れの小石を投げり処駒草は
古木にて惰眠むさぼる合歡の花
栃若葉すいと雨滴を奔らする
亀型へ舟型吹かる釣忍